

# 第5部 進む地球温暖化

②

# 安心再興

ルネサンス

の関係を丹念なデータ調査(一九五三―二〇〇二年)で解析した。

日本樹木医学会支部長の川西玉夫さんは、アロエの異変を挙げる。「二、三十年前から葉が凍り、室内や温室でないと冬を越せなかった。今は屋外放置でも楽々と生きてい

昨年の高松の平均気温十七・三度。一九八〇年ごろの鹿児島や足摺岬と同じだ。日々の暮しでは、その変化にほとんど気付かないが、

二十年、三十年単位で考えると、冬がほとんど寒くならない。春や秋も長く、四季のメリハリが乏しくなっている。

## 身近な植物は

佐和さんは、桜やヒバリなど昔から季節との関係を示す指標となってきた生物たちの変化に目を向ける。高木さんは卒論で「香川における生物季

高木さんは「温暖化が進むとソメイヨシノの開花は早まる」と意外な結論を導く。ソメイヨシノの開花のメカニズムは、「夏に翌春咲く花芽を形成して休眠に入り、秋から冬にかけての低温に一定期間さらされると休眠から覚める(休眠打破)。その後は暖かいほど早く開花する仕組み

# 錯覚からリズム崩す

香川の植物の世界にも異変が表れている。明確に地球温暖化のサインとは言いきれないが、身近に起こる小さな変化を敏感に感じ取り、違和感や不安を持つ人たちがいる。

節の経年変化」をまとめた。

「急激な昇温傾向にあり、特に五月(二・六五度)、十月(二・三度)、四月(二・〇五度)が著しい。春や秋に冷え込む日が少なくなり年平均気温を押し上げたということ

主任技師で樹木医の谷川昭彦さん。樹木は自分を守るために必要な葉を落とすが、冷え込みが来ないため「まだ頑張れる」と錯覚、活動期と休眠期のリズムを崩しているのが原因と解説する。

香川大教育学部四年の高木

イチョウの黄葉・落葉と気温

松でのソメイヨシノの開花や

実際の、昨年(鹿兒島市の開花は、高松より五日遅い三月二十九日(平年より三日遅い)

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

「ご意見、ご感想、情報などをお寄せください。」



街路樹の脇で大きく成長したアロエ。20、30年前なら屋外で越冬することは考えられなかった—高松市内

るでしようね」と農作物への影響を危くする。

香川大教育学部の末広喜代一教授（植物生態学）が心配するのは、県の絶滅危く種に指定されているブナなど冷温帯域に生息する植物だ。植物の場合、環境変化に応じた移動は動物ほど早くはない。温暖化の進行に合わせて標高の高い所などへ後継樹が移動できれば生き残ることも可能だ。しかし、末広教授は「分布可能な場所は非常に限られている。高山植物と呼ばれる種類は、今後ますます生きにくくなる」と説明する。

人間にとってみれば、わずかな気温上昇。春と秋が長くなって過こしやすいと考えるかもしれない。「違う。食物連鎖の底辺にいる動植物への影響を考えると、人間にとって大変なことが起きるシグナルかも」。高木さんの不安が現実味を帯びてくる。

こうした現象は寒冷地を好む果物にも当てはまり、温暖化で冬の休眠が十分でなくなると、花形に異常が表れ出すという。谷川さんは「リングゴヤサクランボ栽培は難しくな